

TOKYO SHOKO RESEARCH

TSR 情報

新春特集号

Vol.37

埼玉県業種別
収益ランキング

埼玉県
増収率ランキング

第2弾

特集

今考えるSDGs

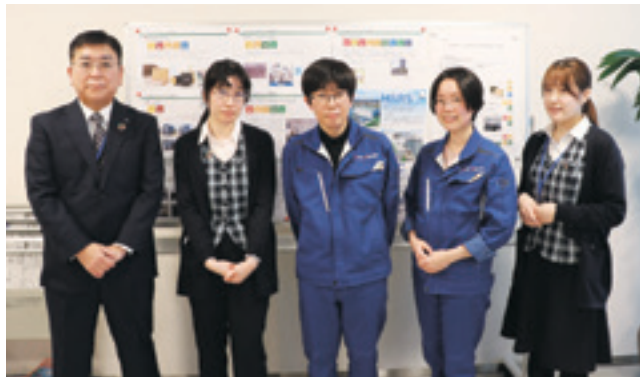
～埼玉の最先端企業を訪ねる～

日本一の
埼玉の
未来



弊社にお任せいただくことが、SDGs

～東武商事株式会社



▲左から岩本耕司執行役員、桑原奈緒子課長、寺尾龍児部長、分析室・猪瀬百合子さん、宋寧順主任

「仕事自体がSDGsに関係しているものですから、敢えてSDGsと言っても、今まで同様、当たり前のことをするだけです。地域クリーン活動として、毎月清掃活動もしていますが、+aとして環境面、人材面で何かできないかを考えているところです。しかし、まだまだやることはあると思います」

執行役員の岩本耕司さんの口調は、至って謙虚だ。東武商事株式会社は、産業廃棄物の処理・リサイクルの「エキスパート」。主な業務は産業廃棄物の中間処理と収集運搬だ。

そこで、まずは業界的に最先端に行く、業務面のお話を聞いた。そう、業務そのものがSDGs。リサイクルの最前線はどうなっているのだろうか。その中で、気になるキーワードが出てきた。「ワンストップ」。行政などでは耳にする単語だが、具体的にはどのようなものなのだろうか。

「基本的に我々は食品残渣などの汚泥を収集して、自社で適正に中間処理したのち、最終処分場に持っていくというのが仕事の流れです。ただ、産業廃棄物の処分については法的に決まりがあり、かつ変化しています。その中で『処分・処理するのは難しい』という廃棄物も出てきています。しかし、お客様としてはなんとか処分したいわけです。そこで、我々は『できません』ではなく、できるだけお客様に寄り添って提案をさせていただいています」

それが「ワンストップ」。工場管理部分析室の寺尾龍児部長に具体的な説明をお願いした。

「例えば、9割が固形ゴミで1割は水分が混合している場合、完全に分離した上でそれぞれを処理します。またタンクの清掃を請け負った際は、清掃に使った水も回収して、自社に戻って処理をします。

できることは『やりましょう』。できないかと思うものでも『でも、やってみよう』という精神。どんなことでもご相談いただければ、最後まで面倒を見るのがポリシーです」

水処理と焼却の2本柱を支えるのは、関東最大級の施設。産廃業のコンサルタント、トータルコーディネートを目指すというのだ。



▲工場内の作業状況は、一括管理されており、モニターで状況が一目瞭然。工場は見学も可能になっており、処理の工程も目の当たりにできる

性別や年齢を超えた適材適所

寺尾部長が続ける。

「そのためにも、分析が必要なのです」

産業廃棄物の処理のために、分析、ですか？

「そうです。まずはサンプルを持ち込んでいただき、分析して、適切に処理できるかどうかを確認しなければなりません。例えば分析方法の一つとして、処理したい固形物を6時間ほど水につけ、有害物質が溶け出さないかどうかを調べます。大事なことは、水、地下水を汚さないかどうかなのです」

処理するにしても、処理の仕方がある。分別できればリサイクルにつながるが、分別されていなければ一般のゴミとして処分されるのと同じ。配慮が必要なのだ。実際、工場には「分析室」と呼ばれる研究施設が



▲まるで研究所のような分析室。それもそのはず、「計量証明事業登録」をしている、第三者機関として埼玉県からも認められている

あり、よりよい処理を目指して研鑽が続いている。

ときとして、仲間同士でも意見の食い違いもあるという。分析室の猪瀬百合子さんが語る。

「まだ2年目なのですが、性別や年齢での遠慮はありません。逆にそういう区別がないので働きやすいと感じています。工場のスタッフとやりとりもし、『こうすれば処理できます』と説明して納得してもらうこともしばしばです」

寺尾部長が付け加えてくれた。

「電話のやりとりを聞いていて『負けるな!』と思うときもあります(笑)」

闊達な職場ということでもある。総務部部門支援室の桑原奈緒子課長が、社内の状況を説明してくれた。

「業界はもともと男性社会。工場内作業や収集業務は、力も使うし、匂いもあります。でも、内勤の女性たちもがんばっていると思います。性別や年齢を超えて、適材適所に人材を置けているのが、我が社の躍進の秘訣かなと」

性別や年齢にとらわれず、みんなが元気の職場でもあるということだ。人事部人事課の宋寧順主任が事例を出してくれた。

「今までは内勤者は、栃木県にある那須総合リサイクルセンターなど離れた施設には同じ会社の中でも行ったことがなかったんですね。那須勤務の皆さんとは、電話だけのやりとりで顔を合わせることはありませんでした。そこで人事部で企画して、女性社員含め『社内工場見学会』を開催しました。好評でしたね」

社内の融和、結束も生まれたに違いない。寺尾部長が続ける。

「画期的なことでした。弊社は本気で社内での相互理解を考えています」

それだけ、会社自体がオープンを目指しているということだ。また社内プロジェクトチームにも自主的

な参画を求め、積極的な意見を交わしている場もあるという。であれば、すでに社内的にはSDGs17の目標にある「⑤ジェンダー平等を実現しよう」のゴールが見えているのではないだろうか。もちろん「⑧働きがいも経済成長も」にもつながっている。

処理、清掃、そしてメンテナンスまで

岩本氏からはこんな話を伺った。

「弊社では、この業界のことを『環境産業』と言っています。排水施設、ポンプ場の汚泥、飲食店厨房のグリストラップ……処理だけでなく清掃も。またメンテナンスそのものがSDGsにつながるのです。そして今、廃棄物のエネルギー化を目指しています。捨てるものを活用できるようになれば、総合リサイクル業になれると考えているのです」

まさに「⑦エネルギーをみんなにそしてクリーンに」だ。近い将来、捨てるものがなくなるのかもしれない。

「私たちががんばれば、がんばるほど、100%社会貢献」(寺尾部長)

まさに業務がSDGsに直結しているからこそこの話だ。最後になったが、今、SDGsを始めようとする企業の皆さんにアドバイスをお願いしたところ、桑原課長にまとめていただいた。

「東武商事に持ち込んでいただければ、適切に処理をします。それがSDGsにつながるのです」

なるほど。頼りになる存在は、まさにパートナー。東武商事の「仕事」を知れば知るほど、SDGsを理解できるような気がする。今日も、社員全員がSDGsバッジを付けて、何ができるかを考えながら、がんばっている。



▲毎月一度、本社周辺で開催している「クリーン作戦」。社員有志が積極的に参加しているという。この日は埼玉県の取り組みに協力した。

東武商事株式会社

代表取締役 小林 増雄
住 所 北葛飾郡松伏町田島東1番地4
U R L <https://www.tobu-s.co.jp/>